

## ランケと史料

——刊行史料、ヴェネツィア報告書、帝国議会文書——

佐藤真一

### 1 はじめに——ヨーロッパ史学史と史料

古代ギリシア以来、今日にいたるまで、歴史家にとって史料の収集とその批判的吟味は、最も重要な課題であった。伝承、目撃情報、多様な文書、遺物、いずれであれ過去の出来事を証言する手がかりを可能なかぎり集め、それに批判的な考察を加え、過去の事実を探求するという容易でない仕事である。近世以降のフラキウス、バロニウス、マビヨン、ヴォルテールの歴史叙述においても、この困難な課題は共有されていた。

すでにヘロドトスは、その著作『歴史』において記していた。「私の義務とするところは、伝えられているまますべてを伝えることにあるが、それを全面的に信ずる義務が私にあるわけではない。私のこの主張は本書の全巻にわたって適用されるべきものである<sup>1)</sup>」。ここにはヘロドトスの伝承にたいする基本的な姿勢が現われている。

また、ツキディデスは『戦史』で主張する。「故事を歌った詩人らの修飾と誇張にみちた言葉に大した信憑性をみとめることはできない。また伝承作者のように、あまりに古きに遡るために論証もできない事件や、往々にして信ずべきよすがもない、たんなる神話的テーマを綴った、真実探求というよりも聴衆の興味本位の作文に甘んじることもゆるされない。しかしそのいずれをも排し、最も明白な事実のみを手掛りとして、おぼろな古事とはいえ充分史実に近い輪郭を究明した結果は、当然みとめられてよい。この論旨は今次大戦の記録にもあてはまる<sup>2)</sup>」。この指摘に、ヘロドトス以上に批判的な精神を読み取りうる

であろう。

このように古代以来、史料とどう向き合うかということは歴史家に負わされた基本的な課題であったと言わねばならない。それでは、「近代歴史学の父」といわれるレーオポルト・フォン・ランケ（Leopold von Ranke 1795-1886）<sup>3)</sup>において、この重要な課題はどのように受けとめられ、歴史考察が進められたのだろうか。

古典文献学を主たる専門としてライプツィヒの学生時代を過ごしたランケが、いかなるきっかけから歴史研究の道に入ってしまったのか、どのような経緯をへて歴史家となる決意を固めたのか。その際、史料についていかなる態度をとっていたのか。最初の著作の付録として公にされた『近世歴史家批判』のなかで、近世の歴史家たちの史書にどのような評価を下したのか。ベルリン大学に招かれたあと、王立図書館所蔵の原史料とどのように取り組むことになったのか。その後、南方研究旅行で訪ねたヴィーンやイタリア諸都市の文書館や図書館での史料研究はいかなるものであったのか。『宗教改革時代のドイツ史』の執筆のためになされたドイツ各地、さらにはブリュッセルやパリでの史料探索はどのようなものであったのか。

本稿では、こうしたことを念頭におきながら、「ランケと史料」について1840年代までの時期を中心に、回顧、書簡、諸著作に見られる彼自身の言葉を手がかりとしながら考察してみたい。

## 2 若きランケの歴史家への道

ランケは1795年、ドイツ中世の栄光をとどめるザクセン選帝侯国の小都市ヴァーヘに生まれた。テューリンゲン地方は、宗教改革が根を下した土地であり、ランケの家は祖父の代までルター派の牧師を輩出していた。この信仰の伝統が彼の精神の根底を築く。1795年はバーゼルの和約が結ばれた年であり、革命フランスとプロイセンの単独講和は、プロイセンに同調する北ドイツに平和をもたらし、ゲーテ、シラーに担われた「ドイツ古典主義」が開花する。革命と反

革命という時代の一端を象徴する年だったということができる<sup>4)</sup>。

1809年から14年春まで、名門ギムナジウム、シュールプフォルタで、ランケは徹底した人文主義教育を受け、古典に沈潜した。1814年5月、彼はライプツィヒ大学に入学する。注目されるのは、学生時代にランケが専攻したのは歴史学ではなく、神学と古典文献学、とくに後者であったことである。ライプツィヒが誇るヘルマン、ベック両教授の指導を受けながら、彼はツキディデスの文献学的研究で博士の学位を取得する（1817年2月）。この論文は失われており、その内容を知ることはできないが、文献学の面からの論述であったとはいえ、ツキディデスの批判的歴史叙述から深い影響を受けたであろうことは、推測に難くない。事実、ランケ自身が、1867年に語っている。「私が深い感銘を受けた最初の歴史家はツキディデスであった。…当時作った抜粋は今なお大切にしまっており、それらは今日なお価値がある<sup>5)</sup>」。

またランケは学生時代、フィヒテの著作、とくに『ドイツ国民に告ぐ』（1807-8）と、ニーブーアの『ローマ史』（1811-12）に深い印象を受け、後者を通じて「近代にも歴史家が存在しうるのではないか」という確信を得た<sup>6)</sup>。古代ローマ史の史料の批判的研究を開拓したニーブーアに宛ててランケは後に書いている。「閣下御自身の『ローマ史』は、私が真に研究した最初のドイツ語による歴史書の1つであります。すでに学生時代、あなたの御著書から抜書きをし、学び取ろうと努めました<sup>7)</sup>」（1824年12月24日付）。

さて、1817年は宗教改革300周年の記念すべき年であった。この祝賀の年を目前にして通俗的なルター伝が多く出版されるなかで、ランケはそれらに飽き足らず、自ら学問的なルター伝を書くことを決意した。1816年末から翌年初めにかけてのことと推定される。秋のライン旅行の中断を除けば、ほとんど1817年全部を費やしたとされるこのルター研究は、あくまで原典に即した徹底したものであった。ルター著作のアルテンベルク版、イエーナ版、ハレ版を読み、卓上語録のアウリファーバー版、アウリファーバー版の書簡集、卓上談話の参加者であったマテジウスの説教集の1734年版など、ランケは参考文献ではな

く、ひたすら原典を読み、原典にのみ依拠しようとしたのであった。

そのさいランケにとって重要であったことは、ルターを時代との関連で考察することであった。ルターのような歴史的存在は、孤立した個人として理解するのではなく、周辺世界との関連で考察しなければならない。これがランケの確信であった。こうしてルターについての研究は、それが進むにつれて、ドイツ宗教改革の研究に拡大していく。政治史がランケを魅了することになる。しかし研究はあまりに広がりすぎて、ランケはルター伝を書くことを断念するに至る。自分の力には余るという思いがあったのであろう。しかし、『ルター断章』<sup>8)</sup>と名づけられるこの歴史叙述の試みは、これ以後のランケの研究にとって貴重な財産となる。

神学、哲学、美学、古代の言語、文学とさまざまな研究のはざままで迷う青年ランケは、ルターの生涯を記述しようという決意とともに、歴史学への道を1歩踏み出したのである。そしてライプツィヒでの生活を終える頃には、知人のあいだで彼は歴史家としての評判を得ていたといわれる。1818年秋にランケはフランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウムに招聘されるが、古典語と歴史の専門教員としてであった。このとき彼は、まだ歴史家となる決意を固めていたわけではないが、すでに歴史研究の基礎は築かれつつあったのである。

### 3 フランクフルト時代と歴史家ランケの形成

歴史家ランケの形成にとって決定的となったのは、翌年1819年の秋に始まった通年の「古代文学史」の講義であった。その準備のために、彼は古代ギリシア・ローマの多くの歴史家たちの史書を体系的に精読したのであった。この経験が歴史家ランケを生み出すことになった<sup>9)</sup>。

フランクフルトでの最初の2年間は、古代史と古代文学史に専念していたが、やがてランケは、中世の歴史家の考察へと歩みを進めることになる。そうしたなかで、ルイ11世とシャルル8世時代に関するコミーヌの『メモワール』

に魅了された。「コミーヌは、観察の鋭さ、豊富なメモと論評の点ですべてに優っている<sup>10)</sup>」。ランケにとって『メモワール』を読んだことが、最初の著書を執筆するきっかけとなった。1821年以後ランケは、授業準備と平行してこのための研究に専心する。

そのさい、フランクフルトのヴェスターマン文庫が研究を導く宝庫となった。ここには、かつてフランクフルト大学の文献学の教授であったヴェスターマンがこのギムナジウムのために寄贈した600冊に及ぶ貴重な書物が所蔵されていた。この図書館で、「中世後期に関しては、古フランスの史料を見出した。15世紀と16世紀の初期が、私をすっかり魅了した。私はここに私の最初の書物を書く立脚点を定めた<sup>11)</sup>」。コミーヌの書物もこの文庫で手にすることができた。

ところで、1821年7月のベルリン文部省宛のランケの書簡によれば、この頃には、ヴェスターマン文庫で利用できる書物はほぼ利用し尽くしていた<sup>12)</sup>。これ以後、最初の書物（1824）の完成に至るまで、最も重要になってくるのが、ベルリンの王立図書館から取り寄せた数多くの文献であった。1824年の末に『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』とその付録『近世歴史家批判』が出版されてまもなく、ランケは文相アルテンシュタインにお礼の言葉を述べている。「閣下は数年前、王立図書館の貴重な蔵書を利用する許可を与えてくださいました。…その蔵書なしにこの両著が完成することはなかったことでしょう<sup>13)</sup>」（12月3日付）。

さて、このように研究の貴重な宝庫であったヴェスターマン文庫も「汲みつくされ」、最初の書物が出版される頃には、フランクフルトではもはや「研究の続行は不可能」と思われるほどになった。オーダー河畔での教師生活自体は悲観すべきものではなかった。授業には大きな喜びを見出していたし、生徒たちもランケを慕っていた。しかしランケにとって最も重要な研究に関しては、すでに狭い世界になっていた。今や、「印刷されていない」史料の利用が切実なものとなった（1824年12月14日付、ニーブーア宛書簡）のである<sup>14)</sup>。

ランケの徹底した史料研究による事実の探求の姿勢は、ロマン主義の風潮のなかで当時広く読まれていたウォルター・スコットの歴史小説に対する反発にもつながっていく。『クウェンティン・ダーワード』（1823）のなかで、スコットが実在の君主たちに、彼らが考えていなかったことを語らせていたからである。ランケは90歳の誕生日に催された祝賀会の席上、寄せられた祝辞に感謝して語っている。

「イギリスでは、きわめて注目すべき現象が生じた。それは、ウォルター・スコットの作品によって文学界を魅了した歴史小説である。人がひたすら求めたこと、すなわち数世紀を余すところなく観察すること、そのことがここで成し遂げられているように思われた。私は当時、まさにロマン・ゲルマン諸民族の歴史に関する研究を始めたところであった。私はコミーヌのメモワールを研究した——ちなみにコミーヌは私に深い感銘を与えた——。そしてコミーヌの周辺に分類されるもろもろの比較的小さな著作のなかに、コミーヌを補う信頼できる記録を見出した。そのようなときに、ウォルター・スコットの『クウェンティン・ダーワード』——だったと思うが——が出版された。口をついて出たのはこんな言葉であった。『何ということだ。コミーヌとコミーヌのメモワールを補足している別の報告は、それとまったく異なっているではないか！』私はさながら、かつての君主を代表して侮辱されているようであった。スコットがつねに彼らの名前を挙げながら、彼らが懐いていたのとは別の考え方を彼らに帰しているからである。私は歴史小説、とくに出来事へのこうした接近に嫌悪を感じ、事実についての確証された伝承から本質的に離れているすべてのものを歴史においては避けねばならないと心に決めた。こうした熟考が、批判的方法に関して私の確信を強めたことを否定しない。この批判的方法は、その後、私の書物の特徴とみなされたものである<sup>15)</sup>。こうしてランケは虚構や創作を避けて、あくまで事実を探求することを決意したのである。

このように歴史小説との対比で歴史学の立場を確認したランケは、救済史的展望に立つ神学的歴史叙述にたいしても、歴史学の方法を区別することにな

る。兄弟のなかで最も親しく交流していた弟のハインリヒは、迷いと挫折の多い青春時代を過ごしたが、1819年の夏リュエゲン島を旅したさいに精神的転機を迎え、素朴なキリスト教信仰に立ち返り、敬虔主義的な色彩の強いキリスト教徒になっていく。その熱心さが学問への姿勢にも反映し、研究分野にまで直接信仰が持ち込まれるようになっていく。ランケはここに弟との「根本的な相違」を見ざるを得なくなり、「私の推論は、すべて経験に基づいて進む」と述べるのである（1823年4月25日、12月28日付、ハインリヒ宛の手紙<sup>16)</sup>。

ランケはすでに、1820年3月末のハインリヒ宛の手紙のなかで、純然たる歴史研究によっても「神に仕える」道があると語っていた<sup>17)</sup>。こうした言葉が、ちょうど「古代文学史」の講義が進められ歴史家への大きな1歩が踏み出されたさなかの言葉だけに、歴史家としての自覚が示されているように思われる。すなわち、熱心な信仰に生きる弟にたいし、弟の心情にそった仕方、歴史学の道を選び取った自己の任務を確認するものと捉えることができるのではないだろうか<sup>18)</sup>。

このような研鑽と歴史家としての自覚をへて、1824年末に『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』<sup>19)</sup>と、この書物の付録として史書の批判的吟味を論じた『近世歴史家批判』<sup>20)</sup>が出版された。

前者は1494年から1514年までが扱われており、ヨーロッパ中世の普遍教会と普遍支配が崩壊して、近代の国民国家体系が形成されていく過程を考察している。ここで注目されることは、ランケがロマン・ゲルマン諸国民の歴史を統一体として捉えようとしていることである。本書が依拠している史料は、メモワール、日記、書簡、公使報告書、目撃者の証言、さらには目撃証言に直接由来するか、何らかの元々の知見によるものと思われる諸著作である<sup>21)</sup>。なかには、フランクフルトのヴェスターマン文庫に所蔵されていたサヴォナローラの説教3篇の写本のような史料も用いられているが<sup>22)</sup>、ほとんどが活字になった刊行史料である。

一方『近世歴史家批判』において、ランケは自らの批判的方法を明確に基礎

づけた。ここでは数多くの歴史家に取り上げられている。とりわけ権威とされてきたグイッチャルディーニは「近世初頭に関するその後のすべての著作の基礎であり、当然先行している<sup>23)</sup>」が、『イタリア史』における史料批判は不徹底で多くの誤りがある、と指摘される。ランケは「グイッチャルディーニの不正確な叙述」にたいし、歴史に関する別の観念を示す。それは「いかなる装飾もないありのままの事実、個々のものの根本的な究明、それ以外のことは神に委ねること。たとえどんなに些細なことでも創作はしないこと、空想に駆られないことだけである<sup>24)</sup>」。

この点で、あまり注目されてこなかったスペインの歴史家スリタ (Zurita 1512-1580) の叙述が評価されている。「近世史に関して私が読んできたすべての書物のなかで、ジェロニモ・スリタの『フェルナンド・カトリック王の歴史』は私に最も多くの知識を与えてくれた。…本書は徹頭徹尾、公使、軍司令官、関与者の報告に基づいている。本書はあくまで文書によっており、公文書に基づく信頼性を備えている。<sup>25)</sup>」。ランケは文書に対するスリタの忠実さを強調し、さらに記している。「スリタは他の歴史家たちをとくに考慮することなく、彼が得た情報を用いた。確かに彼は時折、グイッチャルディーニ、ベンボ、コリオに言及している。しかし彼らがスリタによって利用されているのは稀であることがわかるであろう。あまりにしばしば、彼が依拠している文書は従来 of 叙述と食い違っている。彼は折り合おうとはせず自らの判断を堅持しようとする<sup>26)</sup>」。コミーヌが示している報告が彼の見解に非常に好都合な場合でも、それを正確ではないとみなす場合には、採用しないところがあるという<sup>27)</sup>。ランケによれば、このような文書への依拠によって、歴史は真実な見方を切り開くのである<sup>28)</sup>。印刷された文献史料よりも原史料を重視したスリタにたいして、ランケが高い評価を与えているとみなすことができよう。このような近世の史書に対する批判的吟味によって、ランケは近代歴史学を基礎づけることになる<sup>29)</sup>。

ヨアヒムゼンは、『近世歴史家批判』を「フリードリヒ・アウグスト・ヴォ



ルフの『ホメロス研究序説』（1795）、ニーブーアの『ローマ史』（1811-12、1832）とならぶ、歴史研究の文献学的方法の発展における第3の主要著作」とみなしている<sup>30</sup>。

フランクフルト時代の学問的成果であるこの両著は、好評をもって迎えられ、ランケはベルリン大学に招聘されることになった。

#### 4 ベルリン大学への招聘と南方研究旅行

1825年の春、ランケはベルリン大学の員外教授（1834年以降、正教授）に就任する。ベルリンで、ランケには新たな世界が開かれていく。『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史』をいち早く書評で取り上げ、高く評価したのはファルンハーゲンであった。その妻ラーエルのサロンにランケは招かれ、さまざまな政治的傾向をもつ名士たちから知的刺激を受ける。ロマン派の作家アルニムの妻ベッティーナ・フォン・アルニムとの交流もその1つである<sup>31</sup>。

大学では、当時の各分野を代表する学者たちと出会った。ヘーゲルを中心とするグループとザヴィニ、シュライアマハーのグループとが対立していた<sup>32</sup>。ランケも親友リッターとともに後者のグループに属した。

ランケにとって、何よりも喜ばしかったことは、ベルリンの王立図書館所蔵の史料を存分に利用できるようになり、16、17世紀の南ヨーロッパに関するヴェネツィア公使の手書きの報告書類に沈潜する機会を得たことである。これまでは、ほとんど公刊されたものに基づいて研究してきたランケであったが、これ以後は原史料の利用が始まる。

ヴェネツィアは、公使をヨーロッパのほとんどの宮廷に派遣し、彼らが2、3年後に帰国したとき、滞在した宮廷や国に関して詳細な報告をしなければならなかった。滞在先の君主の人物、宮廷、大臣、財政、戦力、行政の状態、臣民の心情、さらには他国、とりわけヴェネツィアとの関係を報告する義務があったのである<sup>33</sup>。彼らの記録は国家文書館に保管された。1268年の法律は、政府にとって重要なすべてのことを書きとめ提出するように公使に命じる。1465

年以來、「報告」(Relation)の語は、広く用いられるようになる<sup>34)</sup>。こうした報告書の収集は、ヴェネツィア、ローマ、パリにおいて、ドイツでは、ゴータ、そしてベルリンに存在していた。ベルリンの王立図書館は、2つ折り判48巻のヴェネツィア報告書を所蔵しており、そのうちの46巻は、「政治情報」(Informationi politiche)という表題を掲げている。そこには、入省する高級官吏のための指示と訓戒、教皇選挙会議についての報告、書簡、演説、様々な考察とメモなどが含まれている。こうした史料が今後考察の対象となるのである。その成果が、『16、17世紀における南ヨーロッパの諸君主・諸民族』(1827)であった。「主として印刷されていない公使の報告書から」という副題に注目したい。

こうしてベルリン大学に着任して以来、ベルリン王立図書館に所蔵されていたヴェネツィア公使の報告書に沈潜したランケであったが、この研究をさらに深めるためにはさらに一歩進まねばならなかった。ランケは語っている。

「しかしいまや私はここ(ベルリン)にとどまっていることはできなかった。なぜなら、ベルリンの収集は膨大なものではあるが、イタリアの図書館や文書館が提供するに違いない史料に比べれば、きわめて取るに足りないことが容易にわかったからである。わたしはこの宝を発掘するために自ら出かけていくのに必要な支援を得ることができた。そのさい私がまずヴィーンに目を向け、事実行くことにしたのは、ヴェネツィア文書のかなりの部分がヴェネツィアが占領された結果、ヴィーンに運ばれており、実際、この地の文書館に所蔵されていたからである<sup>35)</sup>」。

フランスとオーストリアのあいだに結ばれたカンポ・フォルミオの和約(1797年)の結果、オーストリアはヴェネツィアを獲得した。その結果、この和約以後ヴェネツィアからヴィーンへ運ばれてきた史料が多数あった<sup>36)</sup>。ランケが求めていたのは、このヴェネツィア文書であった。

1827年9月2日にランケはベルリンを立ち、史料の探索と研究のため南方研究旅行に出発し、3年半後にベルリンに帰るまで、まずヴィーン、そしてさらにヴェネツィア、フィレンツェ、ローマその他の都市を訪ね、各地の文書館や

図書館で膨大な原史料に触れ、これ以後の研究の基礎を築くことになる。

プラハをへてランケがヴィーンに到着したのは、9月24日であった。ベルリンにおいて始められた16、17世紀の諸国の研究をさらに深めるためには、ヴィーンにその多くが存在するヴェネツィア文書を利用する必要があったからである<sup>37)</sup>。この都市にランケはまず、1年余り過ごすことになる。ここでランケは貴重な原史料に接する。こうしたランケの史料研究が可能になるためには、ゲンツ（Friedrich von Gentz 1764–1832）の尽力が大きかった<sup>38)</sup>。

ランケの研究のため、このゲンツに推薦状を書いてくれたのがプロイセン文部省の局長カンプツであった。1827年8月31日付のゲンツに宛てた推薦状のなかで、カンプツはランケが「学識と信念によって等しく卓越した尊敬すべき人物」であり、「文部省の承諾を得て大著をまとめるべくヴィーンに赴きます」と記し、ゲンツに丁重に依頼する。「この点につきましてご援助を彼に賜りたいと存じます。彼はそれにふさわしいと確信しております。私とは学問の上で関心が近いので、同氏のことはよく存じております。彼は歴史の分野で抜群の作家となることでしょう。…この人物にたいして全般にわたり、またとりわけヴィーンの歴史的な宝庫への立ち入りに関して、閣下のご愛顧を切に、また慎んでお願い申し上げます<sup>39)</sup>」。

ランケは回顧している。「当時、文書館への出入りが許されることがいかに困難であったかを、今日思い浮かべることはできない。メッテルニヒ侯は、才知に富んだゲンツの提案に従って、文書館利用の許可を私に与えることによって、この上ない貢献をしてくれた。私は以後これを徹底的に利用することを怠らなかった。ヴェネツィア報告書の豊かな宝や、マリノ・サヌドの大部の日記の原本を見つけた<sup>40)</sup>」。

この点を当時のランケの手紙からもう少し詳しく見ておこう。1827年の12月9日、ベルリンの同僚であるリッターに書いている。

「すでにここ数週間、文書館も私に開かれていることをまずお知らせします。文書館の利用には、非常に多くの困難がともないます。私の申請を申し出た公

使は、拒絶の返事を受け取りました。正式な拒絶でした。私が求めていることは、これまで前例にないこと、それを外国人に利用させることは文書館のあらゆる規則に反している、などというのです。落胆しました。しかしその数日後ゲンツが、指定された日にメッテルニヒ侯のところへ行くように命じました。私は2人と会いました。侯は機知にとみ、活発かつ率直で、親しみ深い人でした。彼はどのような点がわれわれの史学に欠けているか、何が文書館から取り出されるべきであるかをよく洞察しており、このために立派な意向を述べています。ゲンツは初めから今日までなんと親切にしてくれたことでしょうか。このことは言い尽くせません。私はしばしば夕食後に彼を訪ねていますし、彼がつねに好意的で、いつも変わらずとても協力的であると感じています。会話の後、私はまずヴェネツィア文書から閲覧したいものの手短なリストを、メモ用紙に表題も署名も書かずに作成しました。このメモ用紙は、リストに記されたものを私に渡してほしいという指示を添えて送付されました。こうして私は実際、手稿史料に埋もれながら仕事をしているのです。ヴェネツィア文書は、確かにすべてがヴィーンにあるわけではありません。完全な形では多分、もはや世界に存在しないことでしょう。2度の火災が、それを著しく減少させてしまいました。そしてここには、内部事情を説明するはずのもののうち、わずかなものしかないのです。しかし、公使の報告書類、とくに16世紀のものについて、計り知れない価値をもつ宝が存在します<sup>41)</sup>」。

ランケがゲンツとともにメッテルニヒに拝謁を許されたのは、1827年11月1日であった<sup>42)</sup>。原史料を直接閲覧できるようになったのは、ゲンツとメッテルニヒの尽力に負うところが多く、それだけにこの2人にたいする感謝の言葉は、ランケの書簡にしばしば見られるのである。

こうした援助の背景には、すでに触れたカンプツの配慮があった。1828年1月16日、ランケはカンプツに宛てて、「どれほどヴィーンでああなたのお陰をこうむっていることでしょう」と感謝し、次のように記している。「ヴェネツィアでの文書館の利用許可の申請は、当初、事務手続きの通例の過程で開始され

ました。しかしその過程で、すでに却下されました。主として閣下が与えて下さいました推薦状を考慮して、宮廷顧問官のゲンツ氏が、私のために大いになくなって下さったばかりでなく、メッテルニヒ侯閣下も私と会い、約束し、私に便宜をはかるよう取り計らって下さいました。どんなに好意的にメッテルニヒ閣下が私に振舞ってくださったか、そして宮廷顧問官フォン・ゲンツ氏がどんなに親切にしてくださったかは言葉になりません<sup>43)</sup>。弟ハインリヒにも書いている。「カンプツがいかに私に関心を示してくれているか、いくら称賛しても足りません。すでにここヴィーンで、彼の推薦状が非常に役立ちました<sup>44)</sup>」。

またヴィーンで、ヴィーン体制下の現実政治に触れる機会を得たこともこれ以後のランケにとって貴重な体験となった。保守派の指導的存在であったゲンツ、革命詩人カラジッチの知遇を得たこともランケの現実認識を育てることになる<sup>45)</sup>。

これ以後ランケは、さらにイタリア諸都市、特にヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ等を訪ね、史料研究を進めていく。ヴェネツィアでは、サン・マルコ図書館、メッテルニヒの助力で利用可能になった国立文書館の豊かな史料を利用することができた<sup>46)</sup>、フィレンツェでもメディチ文書館の利用が可能となった<sup>47)</sup>。

ローマ滞在の目的は、とりわけローマから帰ってきた公使の報告書であり、この地で48の報告書を閲覧することができた。そのうち16世紀については19通、17世紀については21通であった。ヴァチカンの豊富な史料に関しては、必要とするもののうちわずかな巻を見ることができたものの、自由に利用することは許可されなかった。そのかわり、バルベリーニ、チギ、ウルティエリ、アルバーニ、コルシーニ家といった名家の邸宅に所蔵されていた私的コレクションは、自由に利用することができた。そこに保管されていた手書き文書は、ローマ教皇、その国家と教会の歴史にとって、計り知れない価値をもっていた。具体的には、指令や報告書をふくむ教皇大使の文通、教皇や枢機卿の伝記、公・

私の日誌、出来事や状況についての論説、所見、助言、教会管区の管理に関する報告、その他である。これらは数年後、『教皇史』の叙述に生かされることになる。

## 5 『教皇史』と『宗教改革時代のドイツ史』

1831年3月、ランケは豊かな成果を携えてベルリンに帰還する。フランス七月革命の余波に見舞われて騒然とするベルリンでランケは、一時期（1832-36）、『歴史政治雑誌』の編集と論文執筆という仕事に携わるようになった<sup>48)</sup>。この雑誌に寄稿した、イタリアでの史料研究の成果を鮮やかに反映した論文は、「フェルディナント1世とマクシミリアン2世の時代について」であろう<sup>49)</sup>。この長編論文のなかで利用した史料をランケは次のように記している。「ドイツの史料のほかに、私はこれに関して、ヴィーン、ローマ、フィレンツェ、ヴェネツィアで見出した、フィレンツェの弁理公使、数人のヴェネツィア公使、幾人かの教皇大使の報告を用いている<sup>50)</sup>」。原史料からの詳細な典拠が随所に示されている。

ランケの願いは、あくまでも緻密な歴史研究を前提とした時代の緊急の課題への発言であった。しかしそのような道は、革命と復古への分極化が強まる時代のなかでは、支持を得ることはできなかった。彼の本領は、何といても研究それ自体にあった。

さて、南方研究旅行の最良の実りが『教皇史』（1834-36）であった。正確な表題は、『ローマ諸教皇。16、17世紀の彼らの教会と国家』である。3巻からなる本書は、南方研究旅行の途上の徹底的な史料調査、ヴィーン、ヴェネツィア、とりわけ1829年から1年余りのローマ滞在における研究の成果である<sup>51)</sup>。この書物は、宗派的な偏りを免れた書物であり、たとえばルターを破門したレオ10世や、異端審問所の長官でありプロテスタント迫害を推し進めたピウス5世についても、深い理解をもって冷静に描き出している<sup>52)</sup>。すでに、1827年2月のハインリヒ宛の手紙で、ランケは書いていた。「あなたは私を通

じて、彼（ピウス5世）について知っておくべきです。私はあるがままの彼についての報告書をもっています。なんと敬虔な人間なのでしょう。子どものように純真で、この上なく厳格な異端審問官でプロテスタントの迫害者、これらはしかし信念の本質において彼そのものなのです<sup>53)</sup>。また、『教皇史』は文章の明晰さで、ランケの書物の中でも最も広く読まれるものとなった。

他方、ランケ自身のなかで『教皇史』において、宗教改革の歴史が正当に書かれていないことが意識された。すなわち、『教皇史』で「プロテスタント的な要素が完全に公平に扱われていないように思われた」のである<sup>54)</sup>。こうして「プロテスタンティズム成立期のドイツ帝国の発展」を考察することが、次の課題となる。それは、「ドイツ史の最も重要な時期」に関する本格的研究を目指すものであった<sup>55)</sup>。

『教皇史』の第2巻と第3巻が出版される前年の1835年の秋には、すでに宗教改革時代史のために文書館での研究が始められた。

1835年秋の手紙にランケは記している。「9月の最後の週、私はフランクフルト・アム・マインにいました。予想以上に歓迎をうけ、直ちにおびたがましい手書き文書に埋もれて過ごしました。それらはこの上なく素晴らしい発見を期待させましたし、おそらく数年にわたって私を没頭させ、喜びと益を与えてくれることでしょう<sup>56)</sup>」。フランクフルト市立文書館で15、16世紀の帝国議会文書に触れたランケの喜びと、今後の研究への見通しが伝わってくる。

ほぼ1年後、1836年10月16日付の、友人リッター宛の手紙ではフランクフルト再訪を次のように記している。

「秋の大部分を、私はフランクフルト・アム・マインで過ごしました。…私はフランクフルトで、非常に多くのものを見出しました。人々は、協力を惜しまずすすんで、私に帝国の事柄にとって大きな意義を持つかの地の文書館の利用を容易にしてくれました…<sup>57)</sup>」。このときランケは、議員報告書をふくむ1414年から1613年にいたる帝国議会文書、二つ折り判96巻に目を通し、とくに1551年までの最初の64巻と取り組んだ<sup>58)</sup>。1ヵ月後には、高弟ヴァイツに宛て



て、「ドイツの帝国議会文書に没頭しています<sup>59)</sup>」と書き送っている。

こうして始められた史料探訪の旅は、さらにドレスデン、ヴァイマル、デュッセルドルフ、ブリュッセル、パリへと続けられていく。

さて、フランクフルトの史料よりはるかに重要となったのは、ランケがドレスデンとヴァイマルの諸宮廷で探し求めたザクセンの史料である。

1837年4月初め、ランケはマクシミリアン1世とカール5世の時代の帝国問題を調べるため、ドレスデンの王立ザクセン中央国家文書館を訪問する。9年半前、南方研修旅行に向かう初めに訪れた時は、利用を拒まれた文書館であったが、今やさしたる困難もなく、調査の許可を得ることができた。4月8日、ランケはドレスデンから、弟ハインリヒに宛てて書いている。

「冬中、私は帝国議会文書に没頭しました。部屋中が手書き文書で溢れていました。300年この方もはや誰も目にするものなかつたかにかくの書簡を、私は初めて再び読んだことでしょう。まさに今届けられ、開封されたかのように、それらの書簡を読むことを許されたのです……事柄はすべて根本から異なる姿を見せるであろうというのは、その限りで本当です<sup>60)</sup>」。

同じ1837年の8月、ランケはヴァイマルのザクセン・エルネスト家の文書館を訪問する。ここに保管された多量の文書の束は、ランケの求めを満たした。個々の収集は限りなく重要で、マクシミリアン1世治下の帝国議会にとっては計り知れぬほど貴重であった。選帝侯ヨーハン・フリードリヒとヘッセン方伯フィリップの多数の往復書簡、および帝国問題やシュマルカルデン同盟にかかわる記録がランケを魅了した。

1837年9月19日、ランケはハインリヒに宛てて書いている。「私は休暇にさらに、多くの文書館をくまなく探索しようと考えています。まず第1に、ここヴァイマルにやってきました。…私はマクシミリアン1世とカール5世の時代のドイツ史を書くつもりです。この時代にたいしていかに多くの利用されていない史料が見出されるか、まったく信じられないほどです。すでに私はフランクフルト・アム・マイン、ベルリン、ドレスデンで数百の巻や束に目を通した



後で、私はここでとりわけ若干のなお不明な点に関して、落穂拾いばかりでなく、収穫物を見つけ出しています<sup>61)</sup>」。

このような研究を続けてきたランケの見るところ、今や近世史を「目撃者の報告や最も真正の直接的な証拠史料から構成する時が到来している」のである<sup>62)</sup>。

一方、研究の進展とともに、ランケは宗教改革時代のヨーロッパ情勢全般を正確に把握できていないことに気づいた<sup>63)</sup>。そのため、1839年の秋、彼はブリュッセルの文書館に赴き、ネーデルラントにおけるオーストリア家、とくにカール5世の史料に接し、この上ない喜びを味わう。すなわち、そこで「宗教改革史関係文書」25巻を手にし、皇帝カール5世と兄弟との往復書簡をはじめ、当時のヨーロッパ情勢に関連した貴重な史料を読むことができた。シュマルカールデン同盟の結末について知る手がかりも得ることができた<sup>64)</sup>。これらは著作の完成のために、ランケが是非とも必要としていた史料であった。

パリの王立図書館は、ランケにとって近世史研究のための汲み尽せない宝庫であった。所蔵されていた様々な手書き文書のコレクションをランケは丹念に読んでいった<sup>65)</sup>。こうしてランケは、帝国諸侯による当時の世界についての説明ばかりでなく、皇帝の宮廷に関する信頼すべき情報を得ることができたのである。

ここで注目されることは、ランケが18世紀末以降のドイツの思想界に影響を及ぼしたいくつかの思潮とは、異なる道を選び取っていることである。すなわち、歴史を国家利害や進歩の歴史と捉える啓蒙主義的歴史研究（アイヒホルン、ミュラー、シラー）、ルターの敬虔の本質を理解しないロマン主義（ゲレス、ノヴァーリス、シュレーゲル）、ルターを観念的に自由や自律の担い手とし、宗教改革に民族精神の目覚めや世界精神の表明を見る理想主義哲学（フィヒテ、ヘーゲル）とは袂を分かち<sup>66)</sup>、あくまで根本史料に基づく宗教改革の歴史的把握をめざしたことである。

とはいえランケは、「帝国議会文書と神学的論述から読みやすい本をまとめ

ることは、私には不可能に思われた<sup>67)</sup>」、と研究の難しさを率直に認めている。しかしこのような徹底した史料研究に支えられて、ランケの大著が成立する。それでは、こうした根本史料に基づくどのような構成の書物になったのだろうか。

本書は5巻10書の叙述部分と第6巻の史料編からなっている。10書に先立つ「序文」は、ランケの書物の背景にある史料探索を知る上で重要であり、また本書のねらいを示している。「15世紀の最初の数十年から三十年戦争まで、ドイツの国制と政治情勢は、定期的な帝国議会とその決議に基づいていた。…しかし、帝国議会の歴史はまだそれにふさわしい注目を受けてこなかった<sup>68)</sup>」、とランケは述べ、帝国議会との関係で宗教改革の起源と進展を考察するのである。ランケによれば、宗教改革は「われわれにとって最も重要な祖国の出来事<sup>69)</sup>」であり、「根源的な精神内容とともに外面的にも世界的に圧倒的な意義をもつ出来事<sup>70)</sup>」であった。

「序論」は、ドイツ史を国家と教会という観点から、カロリング時代つまり8世紀から15世紀半ばまでを展望し、本論の導入としている。

本論の叙述の大枠は、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世が帝国改革案を承認した1495年のヴォルムスの帝国議会から、宗教和議のなされた1555年のアウクスブルク帝国議会までの時代である。この2つの帝国議会を含む30余の帝国議会が考察され、時代の政治的経過が辿られ、そのなかで宗教改革の展開が描写されている。また、当時の神聖ローマ帝国を取り巻く国際情勢、とくにフランスとのイタリア戦争やオスマン帝国の脅威について詳細に叙述されている。「序論」において、歴史的経過が展望されているとするなら、本論では当時の国際政治のなかでの普遍史的考察がなされている。その構成を見ておこう。

第1書「帝国制度改造計画。1486-1517年」、第2書「ルターとカール5世の初期」、第3書「国民的立場からの改造実施の試み。1521-1525年」、第4書「国際情勢、領邦教会の創設。1521-1528年」、第5書「カトリック多数派の形成。1527-1530年」、第6書「シュマルカルデン同盟の出現。1530-1535年」、

第7書「全般的政治情勢の影響下でのプロテスタンティズムの新たな進展。1535-1544年」、第8書「シュマルカルデン戦争」、第9書「インテリム（仮信条協定）の時代」、第10書「宗教和議の時代」。数多く添えられている脚注には、公刊史料ばかりでなく原史料からの典拠が詳細に記され、ランケの史料研究の精密さが伺える。

第6巻は史料編である。第1章「初期の時代の帝国議会文書」、第2章「歴史家の批判と文献について」、第3章「教会の文書」、第4章「シュマルカルデン戦争にいたる宗教改革の時期の文書による報告」、第5章「シュマルカルデン戦争史について」、第6章「後期の交渉から」という構成で、多くの史料とその解説からなっている。

本書にたいする反響はおおむね好意的であった。ザヴィニはこれまでのランケの書物のなかで最良のものとし、選択と構成の点で卓越していると述べた。『イエーナ文芸雑誌』や『ハレ文芸雑誌』の書評も、史料の利用をはじめ称賛を惜しまなかった。

無論、批判も寄せられた。3つの立場からそれは生じた。第1は、啓蒙主義的・自由主義的歴史学からの無視である。カール・フォン・ロテックにとって歴史研究は立憲的自由の理念にどこまで貢献したかが判断の基準であったし、シュロツァーはランケの文体に反感を抱いた。第2は、カトリックの立場からの判断であり、フィリップスやゲレスによる完全な拒否であった。ランケは、歴史のありふれたプロテスタント的理解・叙述の方法を最も巧みに示しているに過ぎない<sup>71)</sup>。

史料に関する批判という点では、第3のものが関心を惹く。それは、1841年の『ハレ年報』に掲載された「ベルリンの歴史家たち」という書評に代表されるヘーゲル左派からの批判であった。評者によれば、歴史を外交文書、あるいは帝国等族や帝国議会の審議に基づいて構成することはそれ自体称賛に値するように見える。しかしそれらの史料が究極の拠り所であろうか、それらを独占的に利用することによって一面的になり、躍動する生命を見失わせないだろう

か、と問うのである。そして具体的な例を引く。「誰かが、最近25年来のドイツ民族の歴史を、ただドイツ連邦議会の文書から、また様々な公的な国家新聞から、また官報からだけ叙述しようと仮定したら、それは確かに不快な歴史となることであろう。実際、ギリシア人やローマ人がわれわれのように文書館や古文書と多く関わりをもったのなら、彼らは決して歴史叙述の巨匠とはならなかったであろう<sup>72)</sup>」。評者によれば、ランケは状況、統治者、諸侯、外交官だけを見ている。民衆の側からの視点に乏しい。この点は、確かに考慮に値する。ランケ自身が無視しているわけではないにせよ（第2、第3巻）、農民戦争やミュンスターの再洗礼派についてのその後の目覚ましい研究は、そうした面を補うものであろう。

## 6 おわりに——「近代歴史学の父」ランケと史料

17世紀の「科学革命」の時代に始まり19世紀に躍進をとげた近代の自然科学は、実験に基づく法則を追及する科学であった。これに対し歴史学は、何をもちその学問としての性格を確保できたのだろうか。それは史料の批判的吟味であった。その意味で、ランケの史料に対する厳密な態度は、きわめて重要な要因であった。すでに見てきたように、その史料収集はきわめて困難な課題であったし、その吟味も深い洞察を必要とするものであった。当時、文書館・図書館によってはその利用が許可されないことも少なくなかった。そのような制約のなかで、しかも、印刷されていない原史料を丹念に読んでいく仕事は多大な忍耐を強いるものであったに違いない。ランケの回顧や、手紙や著書の言葉にそれは明確に現われていた。今日であれば図書館の書庫で手に取ることのできる立派な完本となっているものも当時は史料の束として、広くヨーロッパ各地に、手をつけられずに保管されていたのである。1820年代後半から30年代はじめにかけてランケによってなされた、こうした労多い史料の探索と研究こそが、近代歴史学形成の土台になったのである<sup>73)</sup>。

ところで、原史料との格闘が、ランケに労苦だけを課していたと見ることは

できない。ランケは記している。

「見たところ無味乾燥な研究に携わり、そのために麗らかな日々を楽しむのをおろそかにする者を憐れんではない。それらが生命のない紙切れであることは確かである。しかし、それらは生命の残滓であり、それら紙切れから生命が徐々に生き生きと心に訴えかけてかけてくる。私にたいして、それらの紙切れは、変わることなく特別な関心呼び起こしてくれたのである<sup>74)</sup>」。

この言葉には、ランケが、時代のなかで懐くにいたった問題関心から出発して過去に問いかけ、真実を探求するとき、そこに歴史との生き生きとし生命的な関係が生じ、喜びが感じられていることが示されている。すなわち、ランケの問いかけを通して、紙切れに過ぎないものに生命が通い、生きた歴史が立ちあらわれる。その喜びが、近代歴史学を基礎づけたランケの忍耐強い史料研究を支えていたことを知るのである。

## 註

- 1) ヘロドトス『歴史』松平千秋訳、岩波文庫、下、1974年、98頁。
- 2) トゥーキュディデース『戦史』久保正彰訳、岩波文庫、上、1974年、73-74頁。
- 3) 佐藤真一『ヨーロッパ史学史』知泉書館、2009年、221-240頁。
- 4) Leopold von Ranke, Am neunzigsten Geburtstag, 21. December 1885, in: *Sämmtliche Werke*, Bd.51/52, hrsg. von Alfred Dove und Theodor Wiedemann (以下、*SW*, 51/52のように略記する), S.592 f.
- 5) Ranke, Beim funfzigjährigen Doktorjubiläum, 20. Februar 1867, in: *SW*, 51/52, S.588 f.『世界史』におけるランケのツキディデス観については、佐藤真一「ランケとツキディデス」『国立音楽大学研究紀要』(以下『紀要』と略記する)第34集、2000年、1-13頁。
- 6) Ranke, Aufsätze zur eigenen Lebensbeschreibung (以下、*LB*と略記する), in: Ranke, *SW*, 53/54, hrsg. von Alfred Dove, Leipzig 1890, S.59.『ランケ自伝』林健太郎訳、岩波文庫、1966年(以下、『自伝』と略記する)、81頁。
- 7) Ranke, Brief an Barthold Georg Niebuhr vom 14. Dezember 1824. in: Ranke, *Das Briefwerk*, Hamburg 1949, S.69.
- 8) Ranke, Fragment über Luther, 1817, in: Ranke, *Frühe Schriften* (L.v.Ranke, *Aus Werk und Nachlass*, Bd.III), hrsg. von Walter Peter Fuchs, München 1973, S.340-466.
- 9) フランクフルト時代については、佐藤真一「若きランケ——フランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウム教師時代(1818-1825)——」『紀要』第36集、2002年、

所収。「ランケ時代のフランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウム」『紀要』第37集、2003年、所収、参照。

- 10) Ranke, *Zur Kritik neuerer Geschichtschreiber. Eine Beylage zu desselben romanischen und germanischen Geschichten*, Leipzig und Berlin 1824, S.159.
- 11) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.32. 『自伝』47頁。
- 12) Ranke, Brief an das Ministerium vom 7. Juli 1821, in: Ranke, *Neue Briefe*, hrsg von Hans Herzfeld, Hamburg 1949, S.22.
- 13) Ranke, Brief an Karl Freiherrn von Stein zum Altenstein vom 3. Dezember 1824, in: *Neue Briefe*, S.54.
- 14) Ranke, Brief an Niebuhr vom 14. Dezember 1824, in: *Das Briefwerk*, S.70.
- 15) Ranke, *SW*, 51/52, S.595 f. ランケは1824年に出版されたドイツ語版の『クウェンティン・ダーワード』を読んでいると推定される。その第3部、第7章の「不確かさ」で、コミースについてたびたび言及されている。Sir Walter Scott, *Quentin Durward*. Aus dem Englischen. Vollständig übertragen und mit Anmerkungen begleitet von B.J.F.v.Halem, Dritter Theil, Leipzig 1824, S.134-160.
- 16) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 25.April 1823, in: *SW*, 53/54, S.109; Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 28.December 1823, in: *SW*, 53/54, S.119.
- 17) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom Ende März 1820, S.90.
- 18) 弟ランケとの往復書簡は、ランケの歴史家への歩みを知る上で重要な手がかりを示している。この点については、佐藤真一「レーオポルト・フォン・ランケの弟、ハインリヒ」『紀要』第35集、2001年、7-16頁。
- 19) Ranke, *Geschichten der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1535*, Bd.I, Leipzig und Berlin, 1824.
- 20) Ranke, *Zur Kritik neuerer Geschichtschreiber*, Leipzig und Berlin 1824.
- 21) A.a.O., S.VI.
- 22) A.a.O., S.107, Anm.
- 23) A.a.O., S.V.
- 24) A.a.O., S.28.
- 25) A.a.O., S.122.
- 26) A.a.O., S.124.
- 27) A.a.O.
- 28) A.a.O., S.125.
- 29) 佐藤真一「ランケにおける近代歴史学の確立——『近世歴史家批判』（1824年）を中心に——」『紀要』第40集、2006年、1-12頁。ランケのグイチャルディーニ批判については、同、7-8頁。
- 30) Paul Joachimsen, Einleitung des Herausgebers, in: Leopold von Ranke, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation* (Gesamt-Ausgabe der Deutschen Akademie. Leopold von Rankes Werke, Historisch-kritisch herausgegeben von Paul Joachimsen), Bd.I. München 1925, S.XXXII.
- 31) ラーエルのサロンで受けた知的刺激については、佐藤真一「ランケとファルンハーゲ

- ン夫妻——ベルリンのサロンでの交流——」森原隆編『ヨーロッパ・「共生」の政治文化史』成文堂、2013年、所収、106-125頁。
- 32) この点に関しては、佐藤真一「ランケとヘーゲル」『紀要』第44集、2010年、1-11頁。
- 33) Ranke, *Fürsten und Völker von Südeuropa im sechszehnten und siebzehnten Jahrhundert. Vornehmlich aus ungedruckten Gesandtschaftsberichten*, Hamburg 1827, S.VI.
- 34) A.a.O., S.VIII.
- 35) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.63. 『自伝』86-87頁。Ranke, Brief an Heinrich Ritter vom 4.Oktober 1830, in: *SW*, 53/54, S.241も参照。
- 36) Theodor Wiedemann (Hrsg.), Leopold von Ranke und Varnhagen von Ense. Unge-druckter Briefwechsel, in: *Deutsche Revue*, 20.Jg. 1895, S.188, Anm.
- 37) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.48, S.63. 『自伝』68頁、87頁。
- 38) この点については、1827年12月9日付のハインリヒ・リッター宛の手紙に印象的に記されている。Ranke, Brief an Heinrich Ritter vom 9.Dezember 1827, in: *SW*, 53/54, S.181.
- 39) Ernst Salzer, Noch ein Brief Rankes an Gentz, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.108, 1912, S.333. カンプツはメッテルニヒにもランケについての推薦状を書いている。Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 25. August 1827, in: *SW*, 53/54, S.169.
- 40) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.63. 『自伝』87頁。
- 41) Ranke, Brief an Heinrich Ritter vom 9. Dezember 1827, in: *SW*, 53/54, S.181.
- 42) Helmolt, *Leopold Rankes Leben und Wirken*, Leipzig 1921, S.174, Anm.
- 43) Ranke, Brief an Kamptz vom 16. Januar 1828, in: *Neue Briefe*, S.99.
- 44) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 10. Juli 1828, in: *SW*, 53/54, S.204. また、Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 25. August 1827, in: *SW*, 53/54, S.169. も参照。
- 45) ゲンツについては、佐藤真一「ランケとゲンツ」『紀要』第47集、2013年、1-11頁。
- 46) Ranke, *Die römischen Päpste, ihre Kirche und ihr Staat im sechszehnten und siebzehnten Jahrhundert*, Bd.1, Berlin 1834, S.IX.
- 47) 1830年5月から7月にかけて3ヶ月間の、再度のフィレンツェ滞在に関しては、Ranke, Brief an Heinrich Ritter vom 6. August 1830, in: *SW*, 53/54, S.239.
- 48) 『歴史政治雑誌』の成立とランケの論考については、佐藤真一「ランケとフランス七月革命」『紀要』第45集、2011年、1-11頁。
- 49) Ranke, Ueber die Zeiten Ferdinands I. und Maximilians II., in: *Historisch-politische Zeitschrift*, hrsg. von Leopold Ranke, Bd 1., Hamburg 1832, S.223-339.
- 50) A.a.O., S.225.
- 51) ローマの私的コレクションの意義についてはすでに触れたが、『教皇史』第1巻のグレゴリウス13世とシクストゥス5世に関する記述は、大部分、ヴィーンの帝室文書館のヴェネツィア文書に拠るものである (Ranke, *Die römischen Päpste*, Bd.1., S.VIII., S.419-481.)
- 52) Ranke, *Die römischen Päpste*, Bd.1., S.80-90, S.350-374.
- 53) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom Februar 1827, in: *SW*, 53/54, S.163.

- 54) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.69. 『自伝』 94頁。
- 55) Ranke, Brief an Ferdinand Ranke vom 23.Oktober 1836, in: *Neue Briefe*, S.225.
- 56) Ranke, Brief an eine Unbekannte vom Oktober/November 1835, in: *SW*, 53/54, S.276.
- 57) Ranke, Brief an Heinrich Ritter vom 16.Oktober 1836, in: *SW*, 53/54, S.285.
- 58) Ranke, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*, Bd.1., Berlin 1839, S.V.
- 59) Ranke, Brief an Georg Waitz vom 11. November 1836, in: *SW*, 53/54, S.287.
- 60) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 8. April 1837, in: *SW*, 53/54, S.293 f.
- 61) Ranke, Brief an Heinrich Ranke vom 19. September 1837, in: *SW*, 53/54, S.297.
- 62) Ranke, *Deutsche Geschichte*, Bd.1., 1839, S.IX.
- 63) Ranke, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*, Bd.3., Berlin 1840, S.III.
- 64) Ranke, A.a.O., S.III f.
- 65) A.a.O., S.V f.
- 66) Joachimsen, a.a.O., S.XXXI.—XCI.
- 67) Ranke, LB, in: *SW*, 53/54, S.70. 『自伝』 96頁。
- 68) Ranke, *Deutsche Geschichte*, Bd.1., 1839, S.III f.
- 69) A.a.O., S.VI.
- 70) A.a.O., S.VII.
- 71) Joachimsen, a.a.O., S.XCII—XCVII.
- 72) A.a.O., S.CI f.
- 73) この同じ時期、ベルツによる中世ドイツ史料集成の大事業が推し進められたことも注目に値する。『モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ』の第1巻が1826年に刊行された。ランケは大きな喜びをもって、この事業を称賛し、ベルリン大学の演習でも用い、愛弟子のヴァイツを編集の協力者として推薦している。ランケの晩年の大著『世界史』では、『モヌメンタ』を典拠として叙述がなされている箇所が多い。この点に関しては、佐藤真一「ランケとベルツ」『紀要』第46集、2012年、1—10頁。
- 74) Ranke, *Deutsche Geschichte*, Bd.1, 1839, S.VI.